宮廷のファッション

洋服の採用

日本の女性が洋服を着用するようになったのは、明治新政府が欧化政策を進めた明治一〇年代半ばのことである。政府は、幕末に欧米と締結された不平等条約の改正を実現するために、日本を西洋の先進諸国と同等とすることを目指した。官庁庁舎を洋風建築とし、服装、結髪、食事などの生活習慣の洋風化や、言語、小説、演劇、美術などの改良運動が進められた。明治一六（一八八三）年に開設された鹿鳴館は欧化政策の象徴であり、ここに集う女性たちが洋服を着用したことはよく知られている。そしてまた女子服の洋装化は、宮廷の儀式や行事の際に着用される礼服においても強く推進された。それまでの宮廷の女子服は、十二単に代表される公家装束であったが、これを洋服に変えることは、日本の近代化を西洋の先進諸国に示す有効な手段と考えられたのである。

宮廷服の洋装化は、明治一九年六月二三日、当時の宮内大臣の伊藤博文が通達を出したことによって始められた。この通達は、「今後は場合により皇后が洋服を着用することになったのに伴い、皇族、大臣、政府高官、華族の夫人も宮中の儀式の際に礼式相当の洋服を着用するように」という趣旨のものであった。伊藤は井上馨とともに急進的な欧化主義者であり、明治一六年頃より洋服採用に強い関心をもっていた。そして、一九年になって宮廷の女子服の洋装化が実現することになるが、これが欧化政策の一環であったことを、お雇い外国人の E. v. ベルツや O. v. モールの記述はよく示している。同年七月、皇后は洋装で学習院へ行啓された。そして翌二〇年の新年拝賀の際に、皇后や女子皇族、そして臣下の女性たちも宮廷の礼服としての洋服を初めて着用した。

礼服の種類

宮廷の礼服として採用された洋服は、当時のヨーロッパの宮廷に倣ったものである。いくつかの種類があり、それぞれ基本的なデザインと、誰がどのような場合に着用するか定められていた。年代により多少の変遷があるが、次の三種をあげることができる。

マントー・ド・クール（大礼服）

宮廷服の中で最も格の高い礼服である。マント・ド・クールは「宮廷のマントー」を意味し、その名の通りマントーを伴うことが特徴である。マントーとは、一般に袖の無い外套をイメージするが、この場合は腰あるいは肩から長く垂れ下がる引き裾のことで、英語のトレイン（train）に相当する。引き裾は身分によって大きさが異なり、皇后のものが最も長くて幅も広く、次いで皇太子妃、女子皇族、臣下の順であった。引き裾を付けるドレスのデザインは、衿ぐりを大きく開け、袖無しか短い袖を基本とした。

マントー・ド・クールは主に新年拝賀に着用され、皇后、皇太子妃、女子皇族の引き裾は「御裳取役」（ページ）と呼ぶ少年によって捧持された。学習院の生徒の中から選ばれた

少年達がこの役を勤め、皇后には六名、女子皇族にはニ名がついた。新年拝賀の他に、皇太子や皇族の婚儀の際に行われる朝見の儀（天皇の皇后に拝謁する儀式）においても着用された。

ローブ・デコルテ　（中礼服）

デコルテとは、大きく開いた衿を意味する。衿ぐりを大きく開け、袖無しか短い袖を基本としたドレスで、大礼服の引き裾を取り除いたドレスと同じ形である。主に宮中の夜会や晩餐会用とされ、皇后、女子皇族、臣下が共に着用した。

ローブ・モンタント（通常礼服または通常服）

モンタントは立衿（スタンド・カラー）を意味する。立衿と長袖を基本とするドレスで、ローブ・デコルテとは対照的である。新年に行われる「講書始」と「歌会始」、また「観桜会」、「観菊会」に皇后と女子皇族が着用した。また臣下の女子は、紀元節、天長節、明治節などに参内し、参賀簿に署名する際などに着用した。昭和一四年以降は戦時色が濃くなり、マントー・ド・クールとローブ・デコルテは贅沢とされて着用が中止され、宮廷の礼服はローブ・モンタントだけとなった。

ファッションの変遷

洋装の宮廷服は、礼服の種類によって基本的に衿の形と袖の長さが定められていたが、ドレス全体のデザインは西欧のその時々の流行に従った。洋服が着用された明治二〇年から昭和初期までのおよそ六〇年の間に流行は著しく変化する。この変遷はおよそ六期に分けることができ、それぞれの特徴はおよそ次のようなものであった。

明治二〇年代初め

コルセットによってウエストを締め付け、後腰を大きく膨らませるのが特徴で、バッスル・スタイルと呼ばれる。バッスルとは腰当、腰枠を意味し、羽毛や綿を詰めたクッション、また針金や籐製の枠や鳥かご状のものを用いて後腰を膨らませたことによる。バッスル・スタイルは西欧では一八七〇年代から八〇年代にかけて流行し、現代から見ると奇妙なスタイルであるが、当時は、あるがままの自然な身体よりも造形的な歪曲に美が見出されていたのである。このスタイルはちょうど鹿鳴館時代に流行したことから、日本では鹿鳴館スタイルとして知られ、当時の風俗を描いた錦絵にもよく見られる。

バッスル・スタイルにおいては、一般にスカートは二枚重ねに仕立て、上スカートをたくし上げたり、前面を開けて下スカートを見せている。また、装飾的であることも特色で、色や材質の異なる布地を二、三種類組み合わせ、タック、プリーツ、ギャザーなどのさまざまな襞飾りを駆使して仕立て、レース、リボン、房などでさらに装飾を施している。

明治二〇年代半ば～三〇年頃

後腰の膨らみは次第に縮小し、スカートの前面の襞も少なくなって平らになり、スカートはウエストから裾に向かってなだらかに広がる。そして、後腰の膨らみの減少に呼応す

るかのように、袖の上方にボリュームをもたせることが行われた。大きく膨らんだパフ・スリーブ、長袖の場合は袖の上方が大きく膨らみ、肘から下が細いレッグ・オブ・マトン・スリーブ（羊脚袖）が主流となった。細く締め付けたウエストを中心として、肩にボリュームがあり、スカートの裾が広がったシルエットは砂時計に見立てられ、アウアー・グラス・スタイルと呼ばれる。

明治三〇年頃～四〇年頃

相変わらずコルセットでウエストを締め付けるが、胸およびウエストのすぐ上の部分にボリュームを持たせるスタイルが主流となった。スカートの後腰にもまだ膨らみが残り、このシルエットを側面から見ると、アルファベットのＳに似ていることからＳ字形スタイルと呼ばれる。また、スカートのウエストから裾に向かっての広がりも、それまでの直線的なものから流線的なものへと変化し、朝顔の花のような形となった。曲線を特徴とするこの年代のスタイルは、当時、西欧で流行した芸術様式のアール・ヌーヴォー・スタイルとの共通性を認めることができる。使用される生地は、それまでの重厚な織物に変わって薄地や柔らかい生地、レースなどが多くなった。

明治四〇年頃～大正時代半ば

後腰の膨らみが多少残されているが、スカートの裾の広がりが少なくなり、全体に細くすっきりとしたスタイルとなった。この年代においてはウエストが高い位置に置かれることも特徴である。そして、シンプルなスタイルに変化を与えるために、アシンメトリーのデザインや、スカートを二重に仕立て、短い上スカートから下スカートを覗かせることがしばしば行われた。使用される生地は前代に引き続き、薄地、柔らかい生地が多い。

大正時代半ば～昭和五年頃

この年代のスタイルは、それまでに比べ著しい変化を見せている。第一次世界大戦（大正三～六）の後、女性の地位の向上や社会への進出はめざましいものがあり、着用する服には機能性、合理性が求められた。ウエストを締め付けるコルセットが取り除かれ、スカート丈が短くなり、また過剰な装飾も排除された。ドレス全体のシルエットはシンプルな筒形をなし、ウエストは細くせず、低い位置に置かれた。直線的なシルエットや多用されている幾何学文様は、当時流行したアール・デコ様式と密接な関係を持つものである。

この斬新なスタイルは宮廷服にも取り入れられ、保守的と思われがちな宮廷の礼服にも脚を覗かせたものが見られる。この頃から、一般にも次第に洋服が着用されるようになり、洋装の女性達はモガ（モダン・ガール）と呼ばれた。

昭和五年頃～一五年頃

前代の斬新な直線的なスタイルは次第に廃れ、女性の身体のラインを生かしたスタイルが主流となった。ウエストを細くぴったりとさせ、胸と腰の膨らみを意識した曲線的なスタイルとなり、スカート丈も次第に長くなった。柔らかな生地を用い、美しいドレープ（襞）が作り出されているものも多く見られる。

宮廷服の生地、文様

宮廷の洋服の生地は、それぞれの年代にもよるが、重厚な紋織物やビロード、光沢のあるサテン（繻子地）、繊細なレースなどが多く用いられている。これらは豪華さや優雅さが求められる宮廷服にふさわしい素材である。生地に表された文様は花をモティーフとしたものが多く、年代によっては幾何学的な文様も見られる。また、皇室の紋章である菊を取り上げたものもあり、桜、楓、藤などの日本的な植物文様も見られ、洋服でありながら和洋折衷の独特の雰囲気をもつものも多い。

文様には紋織りによって織り出されたものと、刺繍が施されたものとがあり、紋織りにさらに刺繍を加えたものも認められる。刺繍は文様を立体的に表現することができるために豪華な印象を与え、これもまた宮廷服の装飾に相応しい技法である。刺繍は金糸、銀糸を用いたり、ビーズやラインストーンなどの光る素材、またパールを併用し、豪華さを増している。

宮廷の礼服として洋服は、明治一九年に欧化政策の一環として採用された。その後、制度の上で多少の変遷があったが、第二次大戦敗戦までおよそ六〇年にわたって着用され続けた。これに対し、一般の女性たちは鹿鳴館時代に洋服を着用したが、一時的なものとして終わり、すぐに和服が復活した。洋服が多くの女性たちに根付いていくのは、女性が次第に社会に進出するようになった大正末から昭和初めにかけてのことであり、さらに一般に広く普及するのは戦後を待たなければならず、その歴史は浅い。このように見ると、宮廷の礼服は現代の洋服の魁であり、日本の洋装の歴史の中で大きな位置を占めていることがわかる。

また宮廷服一般の性格として､それぞれの王室の権威や国力を示すという役割があるが、日本の宮廷の礼服にもその役割が与えられていた。ヨーロッパと同等のものであることが求められ、このためには常にヨーロッパの最新の流行を取り入れる必要があった。宮廷の洋服にはそれぞれの年代の最先端の流行を見ることができ、その変遷はファッション史としてとらえることもできるのである。